



扉の向こう側で

黒木英充

石造りの大きな城門をくぐって旧市街に入ると、石畳の路地は細く曲がりくねり始める。両側は石壁が続き、所々に鉄製の扉がある。そこにペンキで黒い直方体のカーバ神殿の絵が描かれていればそこはメッカ巡礼者の家だ。路地では時折、けたたましい音を鳴らすオート

トバイヤのどかな音をたてるロバの荷車が通り過ぎ、その合間に子供たちが遊び回る。私はある家を探し歩いていた。

1991年11月のある木曜日、シリアの古都アレppoで、イスラム神秘主義者のシャイフ（長老）に会い、翌日そのお宅で開かれるはずの儀式のビデオ撮影の許可を得ようとしていた。シャイフの家には電話がなかったので、直接出かけてお願いするしかなかった。彼とはまだ面識がなく、知人が描いてくれた地図のみが頼りだった。正午頃ようやく探し当てて、鉄の扉をノックする。扉が向こう側に少し開いて誰かと問う女性の声が聞こえた。私は名乗り、用件を告げた。相手は私が見えないし、こちらも路上に立ったまま中が決して見えない角度の場所に身を置く。いわゆる女性隔離社会でのエチケットである。彼女はシャイフの妻のようで、彼は今外出中だと答えた。再度来訪したいと話す、彼女はちょっと待ちなさいと言って、奥の方に向かって誰かに呼びかけたようだ。少ししてから、扉の裏側で彼女は小声で何かしゃべり、扉を引いて壁との隙間を少し広げた。

そこから押し出されてきたのは、可愛い幼児だった。背丈は私の腰よりもずっと低い。色白で垂麻色の髪をした女の子である。その子は真直ぐ前を見たままにっこり微笑んで、左手を挙げてこちらに差し出した。扉の向こうから声がした。「この子があなたをシャイフのところへ連れて行きます。ええ、何処だかちゃんと知っていますよ。」扉は閉じられた。

私は呆気にとられた。でもすぐに気を取り直して、差し出された小さな手をとった。そのために私は腰をかがめなければならなかった。幼児はちょこちょここと歩き始めた。手をつないだ私は中腰のまま、路地を導かれて行った。「お父さんが何処にいるか知っているの？」幼児はうなずき、時々こちらを見上げてにこにこ笑った。何人かとすれ違い5分ぐらい歩いたところで、前から歩いてきた40代半ばくらいの男がこちらを見て笑みを浮かべて行った。「神のお陰なるかな、ようこそいらっしゃいました。」彼がシャイフだった。仕事場の小さな町工場から帰宅する途中だったのだ。私は握手して自己紹介し、ここまで来たいきさつを話した。シャイフは客人を案内した娘をほめて抱き上げた。そのまま道を逆戻りして彼の家へ招かれた。ビデオ撮影は快諾してくれた。

翌金曜日、正午のモスクでの集団礼拝の後、シャイフの家の一室に30人ほどの男たちが集まってきた。リファーイー教団やメウレウィー教団の影響の見られる神秘主義的儀式は、歌の唱和から激しい円舞へと発展し、数人が自らの脇腹や頬に鉄串を突き刺すことをもって最高潮を迎えた。鬼気迫る場面をファインダー越しに目の当たりにし、カメラを持つ手も震えた。2時間以上にわたる儀式の後、男たちはシャイフに振る舞われたお茶を飲んで談笑し、帰って行った。私もシャイフに礼を述べて家を出た。路上では昨日の幼な子が近所の子供たちと走り回り、夢中になって遊んでいた。

路地を歩きながら考えた。昨日、扉を隔てて向こう側にいたシャイフの妻は、姿も見えぬ外国人に対して、わずか2歳半の娘を案内役として預けた。近隣の路上を信用し、私を信用していた。すなわち自らの夫を絶対的に信用していたのだ。それにしても、なんと大胆なことか。東京で同じことが考えられるだろうか。私は、彼女のこの底知れぬ余裕が、まさに都市的精神というものなのだと思った。七千年以上にわたって人間が住み続けてきた都市でこそ醸成された、懐の深きなのだ。

その後1年とたたないうちに、アメリカ南部の田舎町で訪問先の家を間違えた日本人高校生が、「FREEZE!」と言われたのに逃げようとしたため、射殺される事件が起こった。この痛ましいニュースに接したとき、私は、アレppoの旧市街の扉の向こう側にいてついに姿を見ることのなかった女性のことを、反射的に思い浮かべていた。